

ば ば 馬場遺跡第5地点

— 縄文時代後・晩期の大型建物跡の変遷と祭祀 —

上席調査研究員 吉 林 昌 寿

遺跡の立地と周辺の遺跡

馬場遺跡は印西市小林字馬場に所在し、利根川の支流である将監川の左岸、標高28mの台地上に広がる広大な遺跡である（第1図1）。周辺では、印西市道関連で継続的に発掘調査を実施しており、道作古墳群第1次・第2次（第1図2）・駒形北遺跡第3地点（第1図3）等の調査を行っている。これらの周辺の遺跡からは、奈良・平安時代の集落を中心に、先土器時代（旧石器時代）から近世までの遺構や遺物が検出されており、各時代において人々の生活が営まれていたことが分かっている。なお、道作古墳群の調査成果の一部は既に報告書が刊行されているので詳細は報告書を参照していただきたい。

今回、発表の対象となるのは、馬場遺跡の中でも第5地点で、上記同様、印西市の道路整備に先立って実施した。現道拡幅部分は、平成18年度に確認調査を行ない、平成19年度に本調査を実施した。引き続き、平成20年度には現道部分の本調査を行ない、3ヵ年に分けての調査を終了した。本調査対象面積は、平成19年度の拡幅部分が3,665m²、平成20年度の現道部分は592m²である。

調査の概要

調査の結果、拡幅部分では、縄文時代後・晩期住居跡（大型建物跡を含む）7軒、縄文時代土坑150基、奈良・平安時代住居跡8軒・掘立柱建物跡2棟、中世土坑90基等を検出した。現道部分は、縄文時代後・晩期住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、土坑80基、奈良・平安時代住居跡3軒、掘立柱建物跡5棟、中世土坑39基等を検出した。これらの調査により、本遺跡は、周辺の奈良・平安時代の集落と関連しつつも、新たに縄文時代後・晩期の集落が存在するという成

果が得られることとなった。該期の出土遺物は、土偶、土版、石棒、石冠^{せつかん}など祭祀性を帯びた特殊なものが豊富であり、特異な様相を示している。また遺構は、調査区南側から小林鳥見神社前に入り込む埋没谷を囲むように展開する集落構造であることが判明した。

今回の発表では、多数検出した遺構群の中から縄文時代に絞り、拡幅部分からは大型土坑（241号土坑）を、現道部分からは大型建物跡を取り上げる。

241号土坑

平成19年度調査区の中央部付近で検出した。平面形は円形を呈し、直径2.5m、深さ5.3mを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。覆土中からは、後期加曽利B式、曾谷、安行1・2式～晩期の土器まで出土しているが、形になるものは中層付近に集中し、晩期安行3a・3b式の鉢形・深鉢形・台付鉢・甕形・皿形・注口土器などがみられる。その他にも数は少ないものの土偶、有孔土製品、完形の人面付土版などが12点、耳飾り34点が出土している。さらに、土坑内からは大量の貝類（ヤマトシジミやハマグリ等）や獣骨（シカやクジラ等）が出土し、これらの動物遺存体に混じって、総数107点の骨角器も出土している。骨角器の種類は、鹿角製の耳飾り、腰飾り、ハマグリやツノガイ製の玉、サルボウ、ベンケイガイで作られた貝輪などの装飾品、弭^{ゆはず}やヤスなどの漁労具も含まれる。因みに最も出土量が多かったのは貝輪で全体の50%を占めている。

大形建物跡

平成19年度には2軒の住居跡が重複して検出され、縄文時代後・晩期の住居跡であることは把握していた。加えて、平成20年度の現道の調査では、さらに1軒検出し、合計3軒が切り合い、規模が10mを超える大形建物跡であることがわかった。3軒中一番古い大形建物跡Cは加曾利B式期、その次の大形建物跡Bが曾谷式期、一番新しいものである大形建物跡Aが後期安行式期であることが土器等により判明した(第2図下段)。この大形建物跡Aは、覆土の最上層が黒色土で覆われており、大量の遺物を伴っていた。特に遺構確認面の最上部より20cm程の間からは、土偶等の特殊遺物が大量に出土し、これらの特殊遺物を寄せ集めた状況であることが確認できた。出土した土偶も中空で大型のものが多く、晩期安行式期に属する土器と共に出土していることから該期の所産とみてよいであろう。また、特に注目を集めたのが石冠の出土であった。印旛地域だけでなく、千葉県内においても出土例は極めて少なく、当該地域において新たに貴重な資料を得たことになる。

これらの遺物の出土状況からすると、大形建物跡Aの廃絶後、覆土にそのほとんどが覆われた時に、集落内における大形建物跡Aの特殊性を意識した祭祀が行なわれたと想定されるのである。さらに、大形建物跡B及びCは、長い年月をかけて自然に埋まったものではなく、短期間に一気に埋まったか、人為的に埋められたように単一の土層となっている。また、覆土に焼土粒、炭化物片が多く含まれる点や各時期にわたる特殊遺物が多い点などから、同様の祭祀は大形建物跡の古い段階でも行なわれていたと考えられ、3軒の遺構は、継続した流れの中で捉えることができるであろう。

以上の点から

“大形建物跡C→(祭祀)→大形建物跡B→(祭祀)→大形建物跡A→祭祀(最終的な祭祀)”といったような流れの方が、調査によって得た記録との齟齬がないように思う。大形建物跡が単に生活の場としての大型の住居跡ではなく、特別な存在として当

時の人々のより精神的な部分に関わるのであるとしたら、このような土層や遺物の出土状況も肯けるのである。いずれにしても、大形建物跡の性格を考える上でも祭祀との関係は重要であり、詳細な検討が必要であろう。

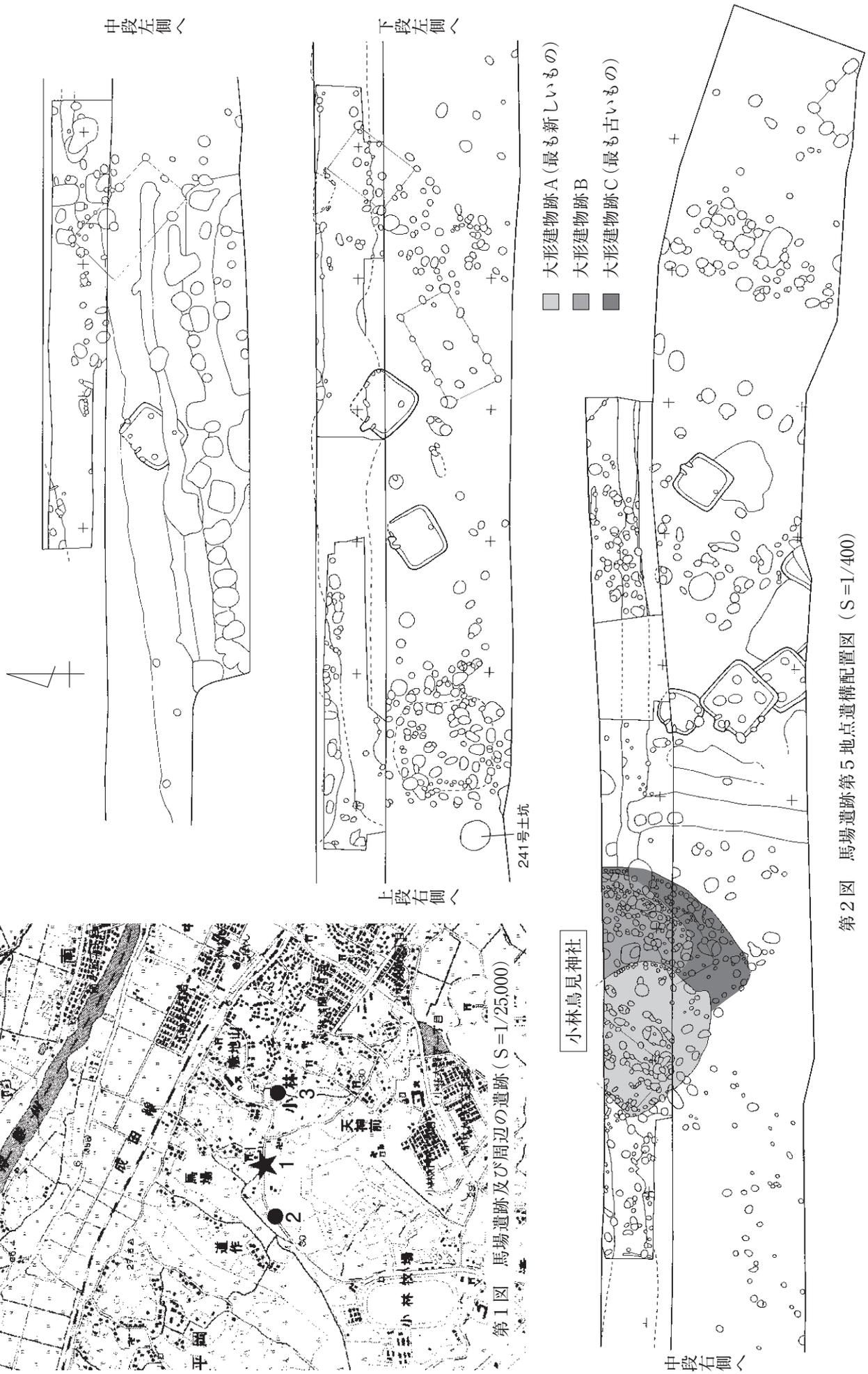
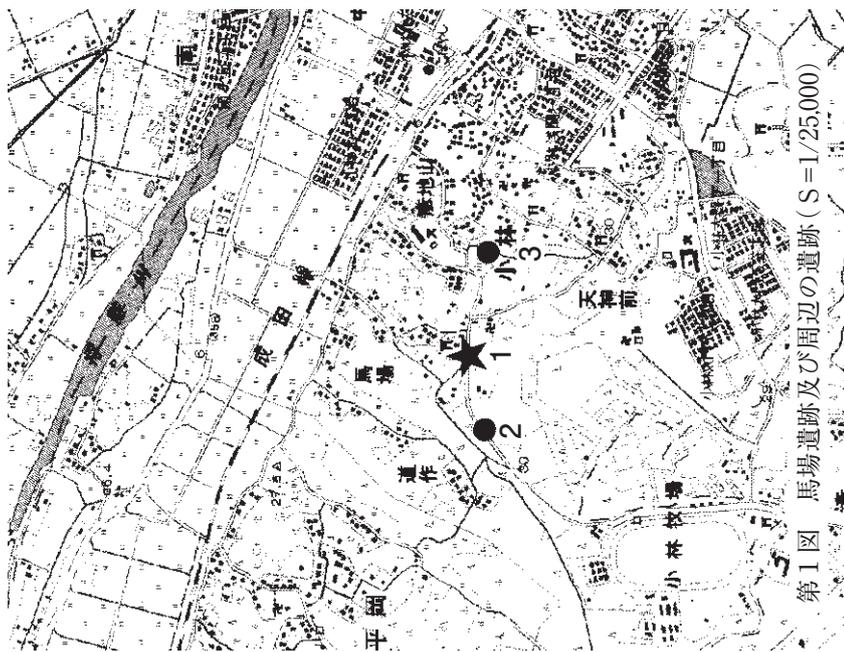
おわりに

縄文時代の祭祀行為が確認された集落の中心部分と想定される上には、小林鳥見神社が建てられている。本神社がこの地に移ってきたのが、江戸時代の後期であると伝えられているが、何故この地なのだろうか。調査開始前に神社の説明看板を見ながらふと思った。そして調査を始めて鳥居前の遺物の出土状況を目の当たりにして、こんなことを考えたのである。

それは、この地を選んだ理由のひとつとして、土偶等の特殊な遺物が多量に出土する地として知られており、何らかのパワースポットとしての意識が当時の人々に根付いていたからではないだろうか。仮にそうであるとしたら、縄文時代後期から晩期にかけて、この地で暮らしていた人々の祭祀にかけた思いである「永遠」といったものが、時を超えて現在につながったのであろう。今回の調査でその一端を垣間見たものの、現在もなお境内地の地下に大形建物跡や祭祀跡の一部が遺され、展開する集落の中心部分も残されているのである。調査によって得られる新たな知見は重要ではあるが、ありのまま後世へと遺していくことも大切な文化財保護であり、それが可能な遺跡であるとも言えるのである。

大切なものを大切にすることが、この地域にあることを神社の役員の方々との会話で感じ、そしてそのような思いがあるからこそ、参拝者が多く訪れるのであろう。

縄文時代の人々が何を祈ったかは定かではないが、自然と人との関わりの中で祭祀が行われたものであるとしたら、鳥見神社の前にその姿を現した大形建物跡は、まさに壮大なロマンとも言えるのである。





石冠（大形建物跡A覆土最上層）



中空土偶（肩部）片（大形建物跡A覆土最上層）



ミミズク形（中空）土偶（大形建物跡A覆土最上層）



ミミズク形土偶（大形建物跡A覆土中）



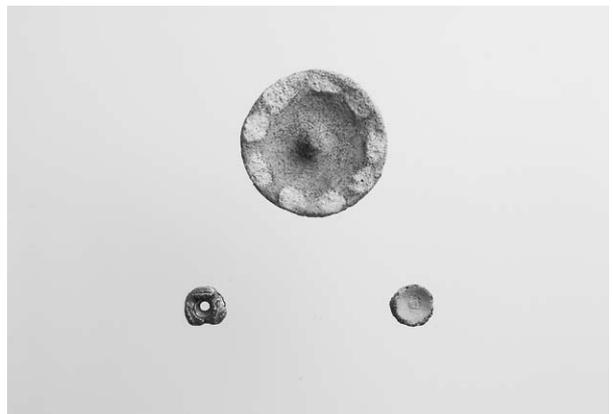
ミミズク形土偶（大形建物跡A覆土最上層）



異形注口土器（大形建物跡A床直上）



動物形（イノシシ）土製品（大形建物跡A覆土最上層）



耳飾（左下のみ石製、赤彩）